

# シノドスへの歩み みことばと共に 年間第三主日C年

小西広志

2022年1月23日

## はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は2022年1月23日 年間第三主日です。今日のミサでの三つの朗読をシノドスの教会の観点から味わっていきましょう。

## 律法

第一朗読で捕囚から帰還したイスラエルの民は律法の朗読を聴きます。「律法」はヘブライ語でトーラーですが、それは動詞ヤーラー（矢を射る）から派生した言葉だそうです。ですので、トーラーは掟というよりも「歩むべき道を指し示すために神が放った指示」と理解してよいのではないのでしょうか。神さまが無償の恵みとして教えた「指示」ですから、「律法」という訳語はあまり相応しくないかもしれません。

「律法」は単なる文字の塊ではなく、神からの生きた呼びかけであり、力の源でした。「律法」、すなわちトーラーによって人はいのちを取り戻し、喜びを覚えるのです。『詩編』にはつぎのようにあります（19編 8-9節）。

**主の律法は完全で、魂を生き返らせ**

**主の定めは真実で、無知な人に知恵を与える。主の命令はまっすぐで、心に喜びを与え**

**主の戒めは清らかで、目に光を与える。**

「律法」に対する、態度は服従よりも「喜び」であり「神からの愛」となります。

## 体は一つでも

第二朗読では冒頭の言葉に注目しましょう。「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である」（1コリ 12章 12節）。本節を直訳すると次のようになるそうです。

**体は一つであって**

**多くの部分を持つ、体の部分は多くあるが**

**体は一つである。**

「一つ」というところが強調されます。人間のからだが多くの部分から成り立ちながらも一つであるように、キリストのからだである教会も一つだという意味で理解してよいでしょう。そして、次の節では「一つの霊」が繰り返されます。「つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです」(13 節)。そうしますと「一つの霊」が働いて「一つの体」となるように洗礼を受けることになります。

## 今日

福音朗読では最後のイエスさまの言葉に注目しましょう。「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」(ルカ 4 章 21 節)。

「今日」という表現はルカ福音書に時々登場します。イエスはザアカイに対しては「今日、救いがこの家に訪れた」(19 章 9 節)と宣言し、一緒に十字架にかけられた盗賊には「はっきり 言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と語ります (23 章 43 節)。そして何 よりも救いから遠いと自他共に思い込んでいた羊飼いたちに天使が伝えます。「今日ダビデ の町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった」(2 章 11 節)。

過去でもない、未来でもない、今、この日、この時に聖書の言葉が実現したのです。

「実現した」はフランシスコ会訳をみますと「成就した」となっています。イスラエルの人々のメンタリティーは、神の言葉が語られるとき、その言葉がそこに実現するというものです。言葉は単なる記号ではなくて、いのちを宿しているのです。イスラエルの人々は、現在に至るまで、例えば出エジプトの出来事の聖書の箇所を朗読して、過越の出来事が時間と空間を越えて、今、ここに「なった」と体感しています。言葉は過去を語るものではなく、今を語るものなのです。

今日の福音のイエスさまのひと言、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」は、救いから遠く離れていると思っている人々に対する恵みの言葉となるのです。

## まとめ

福音朗読でイエスさまが語った聖書の箇所は『イザヤ書』61 章 1 - 2 節です。第三イザヤの召命の場面からの引用です。「主がわたしに油を注がれたからである」(ルカ 4 章 18 節)。油注ぐとは神さまがその人を聖別し、使命を与えることを意味しました。聖書ではある時は王に、ある時は祭司に、ある時は預言者に油が注がれています。

油を注ぐことと「主の霊」は密接に結びついています。今日の福音朗読でのイエスさまのナザレでの第一声は「主の霊がわたしの上におられる」でした。

実際にイエスさまが油注がれたわけではありません。しかし、神の霊の働きの中で、イエスさまは自分が神から聖別され、特別な使命を与えられたことを自覚していきます。そしてこの主の霊がイエスの生涯を通じて寄り添い、助け、励まし、導いたのです。

ところで、キリストとはギリシア語でクリストゥスですが、救い主を表すヘブライ語メシアのギリシア語訳です。しかし、クリストゥスの元々の意味は油注がれた者です。キリストをギリシア語の字義通りに言えば、油注がれた者ということになります。この事実は、とても興味深いと思います。と言いますのも、わたしたちもキリスト者、クリスチャンですから、油注がれた者なのです。『使徒言行録』に「このアンティオキアで弟

子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになった」(使 11 章 26 節)と記されているように、主イエス・キリストに従い、倣うわたしたちはキリスト者なのです。

わたしたちのキリスト者としての生活の中で、油を塗られる(油を注がれる)ことは数えるほどしかないかもしれません。洗礼の時、堅信の時、そして病者の塗油の時です。司祭であれば叙階の秘跡の時です。しかし、いずれも油を塗ることを通して、主イエス・キリストはその人に使命を与えていきます。洗礼式の塗油の場面が分かりやすいでしょう。

**神の民に加えられたあなたがたは、神ご自身から救いの香油を注がれて、大祭司、預言者、王であるキリストに結ばれ、その使命に生きるものとなります(成人洗礼の儀式書より)。**

司祭の叙階式では塗油によってキリストと結ばれたことがさらに強調されます。

**御父は聖霊の力によって、主イエス・キリストに油を注がれました。**

**信じる人々を聖なる者とし、**

**感謝の祭儀をささげるために選ばれたあなたを、キリストが守ってくださいますように。**

塗油を受けるということは、キリストに結ばれることを意味するのです。キリストの祭司職、預言職、王職に結ばれて、キリストと同じ使命をいただき、キリストのように生きることを意味するのです。秘跡における塗油は単に儀式的な「しるし」だけではないのです。

もちろん、洗礼は生涯で一度だけ、堅信も一度だけです。ですから、塗油を頻繁にしてもらって、信者としての使命を再確認することはできません。しかし、いただいた恵みをよみがえらせ、再生させさせることができるのが秘跡です。いつも、折々に応じて、わたしたちは洗礼と堅信の時に塗油していただいたことを思い起こすことができます。こうして、自分の中におられる「主の霊」の働きを新たにし、活性化することはできると思います。第二バチカン公会議の『教会憲章』にはつぎのようにあります。

**洗礼を受けた者は、新たに生まれ聖霊の塗油を受けることによって、霊的な家および聖なる祭司団となる。それは、彼らがキリスト信者としてあらゆるわざを通して霊的ないけにえをささげ、闇から驚くべき光へと彼らを招いたかたの力を告げる者となるためである(『教会憲章』10)。**

「聖霊の塗油」を受けて、キリスト者とさせていただいたことにわたしたちは感謝すべきですし、そのおかげで、それぞれが生きている場で、社会で、自分の人生を惜しみなく誰かのために明け渡して生きていく使命があるのだということをいつも心に刻んで生きていきたいものです。

それでは、また来週。